

## 【臨床・研究】

## 大学1年生における子宮がんに対するアンケート調査

こうの よしえ 江 小 うみ しづこ  
河 野 美 江 小 海 志津子

キーワード：大学1年生，子宮がん検診，HPV，アンケート調査

---

### 要 旨

---

近年本邦において，子宮頸癌発症が若年化している。厚生労働省は2004年に20歳以上の女性に子宮がん検診を行うよう指針を出したが，20代女性の受診率は約20%と極めて低い。今回，大学1年生における子宮がんに関する知識や希望を知るために，アンケート調査を行った。対象はA大学1年生274名で，子宮がんについて「名前も病気も知っている」と答えた学生は12.8%と少なく，子宮がんに関する教育が不十分な現状が明らかになった。がん検診に希望する条件は，「プライバシーの守られた医療機関で，ゆっくり説明してもらえる」「料金が無料，安い」「検診の精度が信頼できる」の3項目を選んだ学生が半数以上あった。以上の結果より，高校生以上の女性に対して子宮がんについて教育することが急務であると考えられた。医療機関においては，若い女性が子宮がん検診を受診しやすく，ゆっくり説明を聞くことができる体制を構築することの必要性が示唆された。

---

### はじめに

近年本邦において，子宮頸癌発症の若年化が進行している。子宮頸癌の原因はHuman papilloma virus (HPV) 感染であることが明らかになり，2004年に厚生労働省は検診受診対象を20歳以上の女性にする指針を出した<sup>1)</sup>。しかし，現在の20代女性はHPV感染について性教育を受けていない年代であり，発癌の高危険群であるにもかかわらず，

検診受診率は約20%<sup>2)</sup>と欧米に比して極めて低い。

今回，A大学1年生を対象に，子宮がんに関する知識や希望を知る目的で，アンケート調査を行ったので報告する。

### 対象と方法

2009年7月に，著者が講義を行ったA大学2学部1年生のうち，研究の目的を説明し同意の得られた学生にアンケート調査を施行した。質問紙の回収率は95.3% (281/295) で，そのうち回答が不十分であったものを除いた274名 (有効回答率92.9%) を分析対象とした。対象の背景は，平均年齢

Yoshie KONO et al.

1) 島根大学保健管理センター

2) 松江生協病院臨床検査科

連絡先：〒690-8504 松江市西川津町1060

18.6±1.4歳 (18~38歳), 男女別では男子130名 (平均年齢18.7±2.0歳), 女子144名 (平均年齢18.5±0.6歳) であった。

方法は, 必修の一般教養科目講義後に, アンケートを配布した。これらの調査はプライバシーに十分配慮し, 研究目的以外に用いることは決してないことを説明し, 無記名で回収した。調査内容は他の調査を参考に①年齢, 性別②子宮頸がん・HPV に対する知識③希望するがん検診について尋ねた。統計処理は  $\chi^2$  検定を行い, 5%未満で有意差ありとした。

### 結 果

1) 「あなたは子宮頸がんについて知っていますか?」という問いに対して, 「名前も病気も知っている」は12.8% (35/274) で, 「名前だけ知っているが病気については知らない」は63.1% (173/274), 「何も知らない」は24.1% (66/274) であった (図1)。男女別では「名前も病気も知っている」と答えた男子は14.6% (9/130), 女子は11.1% (16/144) で, 有意差はなかった。「名前も病気も知っている」と答えた人のうち, 知識を得た方法 (複数回答あり) はテレビ番組57.5%, 学校

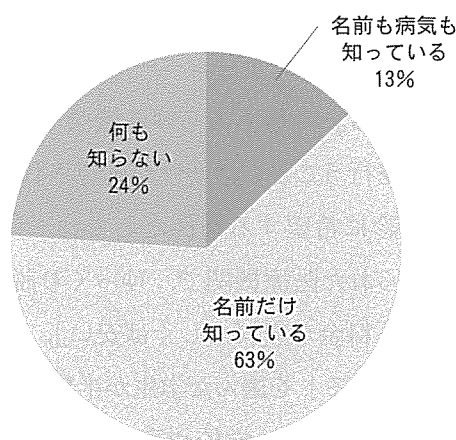


図1 子宮がんについての知識

の授業15%, 本・雑誌12.5%, 母親から7.5%, 医療機関5%, ノーベル賞展2.5%であった。

2) 「子宮頸がんの原因はHPV (ヒト・パピローマウイルス) であることを知っていますか?」という問いに対して, 「よく知っている」は6.2% (17/274) で, 「名前は知っているがどのような病気を起こすウイルスかは知らない」は20.8% (57/274), 「何も知らない」は73.0% (200/274) であった。

3) 「子宮頸がん検診は20歳から受けることが推奨されていることを知っていますか?」という問いに対して, 「よく知っている」は8.8% (24/274) で, 「あまり知らない」「全く知らない」を合わせて91.2% (250/274) であった。男女別では「知っている」と答えた男子は6.9% (9/130), 女子は10.4% (15/144) で, 有意差はなかった。

4) 「子宮頸がんは30代が最も多いことを知っていますか?」という問いに対して, 「よく知っている」は5.8% (16/274) で, 「あまり知らない」「全く知らない」を合わせて94.2% (258/274) であった。

5) 「どのような条件ががん検診に必要だと思いますか?」 (複数回答可) という問いに対しては, 「プライバシーの守られた医療機関で, ゆっくり説明してもらえる」が74.1%, 「料金が無料もしくは安い」が65.3%, 「検診の精度が信頼できる」が51.5%, 「検診車で, 学校や家の近くでできる」が31.4%, 「大学祭やイベントなどに併せて行う」が9.1%, 「精度はやや落ちてでも自分で出来るキット」が5.1%であった。「その他」は0.7%で「希望したら健康診断でできること, ポスターなどの情報が必要」であった。女子のみでは, 「プライバシーの守られた医療機関で, ゆっくり説明してもらえる」が72.2%, 「料金が無料もしくは安い」が68.1%,

「検診の精度が信頼できる」が54.9%、「検診車で、学校や家の近くでできる」が34.0%、「大学祭やイベントなどに併せて行う」が9.7%、「精度はやや落ちても自分で出来るキット」が3.5%であった(表1)。いずれの項目においても、男女間に有意差は認められなかった。

## 考 察

近年本邦において、性交開始年齢の低齡化に起因して子宮頸癌発症の若年化が進行している。子宮頸癌の原因はHPV感染であることが明らかになり、HPVワクチンが開発され本邦においても年内の発売が予定されている。また、30歳以上の女性においては、細胞診・HPVテスト併用検診の有用性が報告されている<sup>3)</sup>。

しかし、20代女性におけるHPV感染は非常に高率で、多くは一過性感染で消失するため、HPV検査は推奨されていない<sup>4)</sup>。一方、子宮頸部細胞診は症例対照研究・コホート研究により、明確に有効とされており<sup>5)</sup>、厚生労働省は2004年に20歳以上の女性に子宮がん検診を行うように指針を示した<sup>1)</sup>。しかし、HPV感染と子宮頸癌発症の関連性が証明されたのは最近の見解であり、現在の20代女性はHPV感染に関連した性教育を全く受けていない。そのため10代から性交経験率が高く発症の高危険群であるにもかかわらず<sup>6)</sup>、市町村の広報やマスコミからしか知識を得る方法がなく、子宮がん検診受診率は約20%と欧米に比して極めて低い。

本研究ではこうした背景を考慮して、大学1年生を対象に子宮がんに関する知識や希望についてアンケート調査を行った。まず、子宮がんに関する知識の状況は「名前も病気も知っている」と答えた学生が12.8%と予想以上に少なかった。知識

表1 がん検診に希望する条件(%)  
(A大学1年生への質問紙調査による)

条件	全体(n=274)	女子(n=144)
プライバシーの守られた医療機関	74.1	72.2
料金が無料、安い	65.3	68.1
検診の精度が信頼できる	51.5	54.9
検診車で学校や家の近くでできる	31.4	34.0
大学祭やイベントに併せて行う	9.1	9.7
自分で出来るキット	5.1	3.5
その他: 希望したら健康診断でできる ポスターなどの情報		

を得た方法はテレビ番組が最も多く、続いて学校の授業、本・雑誌、母親からであり、子宮がんに関する教育が不十分な現状が明らかになった。HPVの知識や子宮頸がん検診の有用性については、知っていると答えた学生はさらに少なく、女子においても同様の結果であった。一般女性におけるアンケート調査によると、子宮がん検診未受診者が受診しない理由は「時間がない」「費用がかかる」に次いで、検診に関する「情報不足」や子宮頸がんに関する「知識不足」と報告されている<sup>2)</sup>。20歳以上の女性において子宮頸がん検診が推奨されていることを考えると、高校生以上の女性に対して子宮がんについて十分に教育することが急務であると思われた。我々は、学校・地域において性教育講演会を行っているが<sup>7)</sup>、特に高校・大学においては、性感染症の説明の中で必ずHPV感染や子宮がん検診の必要性を話している。また、イベントや、ホームページ<sup>8)</sup>による啓発活動を行っている。今後もあらゆる機会をとらえて、啓発活動を行うことの必要性が確認された。

がん検診に希望する条件としては、「プライバシーの守られた医療機関で、ゆっくり説明してもらえる」、「料金が無料もしくは安い」、「検診の精度が信頼できる」を選んだ学生が半数以上あった。反対に「検診車で、学校や家の近くでできる」、「大学祭やイベントなどに併せて行う」、「精度はや

や落ちても自分で出来るキット」を選んだ学生は少数であった。本邦においては、子宮頸がん検診は検診車による出張方式と、施設検診による集団検診で全国的に普及したが、最近の若い女性においては検診車を利用した集団検診というスタイルが好まれず新規受診者が減少傾向にある<sup>9,10)</sup>。本研究でも、現在の大学生はプライバシー権や自己決定権の浸透した時代に育っており、プライバシーの尊重やインフォームド・コンセント、検診の精

度を重視していることがわかった。さらに学生は経済的に余裕がないため、「料金が無料もしくは安い」ことを希望しており、現在自治体で行われている「20歳の無料クーポン券配布」は有効と考えられた。

今後、医療機関においては、若い女性が子宮がん検診を受診しやすく、ゆっくり結果の説明を聞くことができる体制を構築することの必要性が示唆された。

### 参 考 文 献

- 1) 厚生労働省：「がん予防重点健康教育及びがん検診実施のための指針」の一部改正について，2004
- 2) 子宮頸がんから女性を守るための研究会：子宮頸がん検診に関する調査報告書，2008
- 3) ACOG Practice Bulletin: clinical management guidelines for obstetrician-gynecologists. *Obstet Gynecol* 102: 417-427, 2003
- 4) Monsonego J: HPV infections and cervical cancer prevention. Priorities and new directions. *Gynecol Oncol* 96: 830-839, 2005
- 5) 平成13年度がん検診の適正化に関する調査研究事業「新たながん検診手法の有効性の評価」報告書. 日本公衆衛生協会, 2001
- 6) 河野美江, 戸田稔子, 脇田邦夫, 高橋正国, 入江 隆, 紀川純三, 寺川直樹: 10代女性における子宮頸部擦過細胞診の意義. *日本臨床細胞学会誌*40(1), 1-3, 2001
- 7) 河野美江: 学校・地域保健連携推進事業における産婦人科専門医のかかわり. *第37回全国学校保健・学校医大会誌*266-270, 2006
- 8) 女の子のためのER: <http://www.onnanokonotame-no-er.com/>
- 9) 岩成 治, 倉田和巳, 加藤一郎, 片桐 浩, 岸本聡子, 渡辺知緒, 上田敏子, 吉野直樹, 栗岡裕子, 森山政司, 長谷川明広, 小村明広: 地域がん登録で検証した子宮頸がん検診の問題点と改革案. *島根医学*26(4), 29-39, 2006
- 10) 今野 良, 山川洋光, 鈴木光明: 子宮頸がん検診の現状と問題点. *産婦人科治療*94(1), 120-131, 2007